



日本国際教育学会

JIES NEWSLETTER

February 2007 No.18

ニュースレターダイジェスト

学会長挨拶
第17回 秋季大会報告
総会議事録
決算報告と予算案
事務局だより
2007年春季大会の案内
紀要『国際教育』第13号原稿募集
図書紹介
寄贈文献一覧
研究調査エピソード：台湾編
シンポジウムのお知らせ



第17回大会シンポジウム的一幕
(2006年11月26日、東北大学)

学会長挨拶

日本国際教育学会第17年目を迎えて

会長 江原裕美(帝京大学)

日本国際教育学会は第17年目を迎えました。まずは先の11月26日、東北大学での第17回大会が成功を修めましたことを会員の皆様にお知らせし、開催まで大変ご努力下さいました、宮腰英一大会実行委員長、大迫章史事務局長、白幡真紀実行委員初め関係各位に心より御礼申し上げます。秋深まる杜の都仙台で、国際教育の新たな展開を思わせる充実した発表の場を作って下さいましたことは、参加した会員全員にとって非常に有意義な機会となりました。改めて参加協力下さいました東北大学関係者の皆様と各地から駆けつけて下さった会員各位に深く感謝申し上げます。これを機会に、東北大学を中心に、北日本における日本国際教育学会の活動が今後さらに発展しますよう祈念する次第です。

また、私もこの度第二期目の会長を仰せつかり、責任の重大さに身も引き締まる思いをしております。力不足ではありますが、皆様のご協力を頂きまして、第一期目には懸案でありました学会財政基盤の健全化にある程度のめどを付け、規約の改正を果たし、二十周年に向けての準備として積立を開始、また、公開講演会・研究会の試みを開始致しました。第二期目には、さらなる財政の健全化と規約の整備、中国連絡処との連絡活発化、名簿および新規約集の発行、学会研究活動の活発化、そして、

海外大会の成功を目指しております。ちなみに2007年度の大会は11月に台湾の台北教育大学で行う予定です。

本学会は1993年に中華人民共和国蘇州大学と共催で第4回大会（国際教育研究大会）を開いた実績がありますが、今回は二回目の海外大会ということになります。東アジアにおける学問を通じた相互理解深化・共同体形成に向け、本学会も微力を尽くす機会になればと願っております。台北教育大学の翁麗芳教授も第17回大会にご参加下さり、歓迎の言葉を下さいました。大会の成功を目指して皆様のご参加ご協力をお願い致します。私も第二期目の目標を果たし、諸先輩会員が築いて下さいました学会の美風をさらに確固としたものとするべく、弱輩ながら会長として使命に邁進する所存です。

地球温暖化、資源の枯渇化初め、環境問題の悪化が一層明確になった地球の中で、豊かさへの大競争が始まっています。様々な争いや殺し合いは止む気配がありません。エコロジカルな思想、質素儉約の文化、異文化を取り入れての近代化、悲惨な戦争からの再起、公害問題の惨禍、様々な経験を持つ日本には、何かできることがあるのではないのでしょうか。しかし、グローバル化の大波の中で、多様な情報や人の流れ、異なる文化にどう対峙し、平和で活力ある社会を作り上げていけるのか、まだ展望は明らかになっていません。このような時にあって研究環境も大きく変わりつつある中で、真摯な国際教育探究の場としての本学会を維持発展させ、学術活動を通じた社会貢献を実現していくことはますます重要になってきていると考えます。国際教育のさらなる探究のため、知的刺激と人間的交流の、自由で開かれた場として本学会が一層発展致しますよう、会員の皆様のご参加ご協力を改めて宜しくお願い申し上げます。

第 17 回 大 会 秋 季 大 会 報 告

1. 日本国際教育学会第17回大会を終えて

大迫 章史(仙台白百合女子大学)

日本国際教育学会第17回大会が、2006年11月26日(日)に東北大学大学院教育学研究科を会場として開催されました。第17回大会は諸事情により、これまでの秋季大会と異なり、大会期日を1日で実施する形を採ったこと、また大会をお引き受けしたものの、会員数の少ない東北地区での開催であったことなどにより、さまざまな面で少々不安はございましたが、学会役員の方々をはじめ、会員の皆様のご支援・ご協力により、大会を無事終えることができました。以下、簡単に、シンポジウム、自由研究発表、懇親会について報告させていただきます。

第17回大会のシンポジウムは公開とし、「国際交流の一世紀」と題して開催しました。大会開催校である東北大学は、2007年には創立百周年を迎え、魯迅をはじめとして、これまで多くの留学生を受け容れてきました。一方で、教育における国際交流や留学生問題は国際教育分野においても、主要なテーマの一つとなっています。そこで、東北大学で日本国際教育学会を開催する意義の一つの表現として、本テーマを設定しました。

シンポジウムにおいては、渡邊剛氏、中島美樹子氏、岡田昭人氏の3名のシンポジストから、各氏がこれまで留学生に携わってこられた経験をもとにしながら、留学生の交流をめぐる歴史、現状、課題について刺激的な報告が行われました。そして、これら報告を受けて、シンポジストとフロアとの間で、現代の日本が抱える留学生問題について活発な議論が展開されました。

自由研究発表は午前の部・午後の部で5分科会を設定し、11名の国内・国外の会員から発表していただきました。発表件数についても、仙台という地理的条件もあり、どれだけの会員の皆様に発表していただけるか

不安もございましたが、幸いにして多くの発表を得ることができました。

自由研究発表の内容は、国際教育学会の名にふさわしく、アメリカ・イギリス・オーストラリアやアジアの教育に関する発表をはじめ、多岐にわたるテーマで発表が行われました。

自由研究発表、シンポジウム終了後、懇親会を開催しました。懇親会も幸いにして、多くの参加があり、研究交流をはじめとして、会員間相互の親睦をこれまで以上に深めていただくことができたのではないかと考えております。

最後になりましたが、大会実行委員会の不手際等も多々あり、ご迷惑をおかけしたこともあったかと存じます。参加して下さった会員の皆様のご支援・ご協力により、第 17 回大会を遂行することができましたことに深くお礼申し上げます。

2. 秋季大会の感想

日本国際教育学会第 17 回大会に参加して

羽井佐昭彦（千葉工業大学）

今大会にて、「英国における自己表現力育成教育に関する一考察」という題目で発表をさせていただきました羽井佐昭彦と申します。このテーマは、平成 17～19 年度の科研費補助金の交付を受けて研究を進めているものです。私の専門は、英語教育、特に英語教授法、語用論、談話分析といった領域ですが、今回進めている研究分野が英語教育を超え、カリキュラムや政策などを含めた言語教育全般を扱うため、発表場所を探しておりましたところ、当学会のグレゴリー・プール先生にこの学会を紹介して頂き、発表の機会を頂いた次第です。

今回、当学会に初めて参加させていただきましたが、とてもアットホームで和やかな印象を受けました。初めての参加にも拘わらず、数名の先生方に声をかけて頂き、楽しくお話ができたこと、また質疑応答では、親身になって、厳しさの中にも暖かみのあるアドバイスをして頂きましたことにも大変感謝しております。研究発表については、教育という点での共通項はありますが、様々な国についてのご発表があり、初めて知ることも多く、大変興味深く聞かせて頂きました。もっとゆっくりお話も伺いたかったのですが、翌日 1 時間目より授業があり、懇親会に参加できなかったことがとても残念です。

私的な話で恐縮ですが、かつて東北工業大学に勤務しておりました、前日、仙台に着いた時にはとても懐かしい気持ちになりました。発表の準備が十分ではなかったのも、ホヤをつまみに一杯という余裕はなかったのですが、牛タン定食に舌鼓を打ちました。また、当時の非常勤先の宮城学院女子大学で大変お世話になった宮脇弘幸先生と大会会場で久しぶりに再会し、旧交を温めることができたこともとても嬉しいことでした。最後に、突然の入会にも拘わらず、暖かく迎え入れて発表までさせて頂きましたことに対し、大会実行委員長を始め、事務局の方々に心よりお礼申し上げます。

研究大会に参加して

若園雄志郎（早稲田大学大学院）

日本国際教育学会には 2006 年の春季大会より参加いたしております。今回の秋季大会では自由研究発表も行うことができました。

今回の大会で他の皆様のご発表とそれへの質疑を通じ、非常に多くの忌憚のない意見が交わされていることに感銘を受けました。秋季大会で初めて自らの自由研究発表を行ったのですが、これまであまりなかった鋭いご意見をいただけ、非常に勉強になったと感謝しております。また同時に、海外研究に対する自らの勉強不足を痛感いたしました。分科会は 5 つに分かれておりましたが、それぞれの

分科会に、共通する主題（例を挙げるならば「言語政策」や「成人教育」など）を出していただければそれぞれの分科会の性格がわかりやすかったのではないかと感じました。

シンポジウム「国際交流の一世紀」は主に留学生に関する議論が交わされ、これまであいまいにしか知らなかったことが話題としてあがるなど、大変興味深く伺うことができました。ただ少々時間が十分ではなかったため、議論が尽くせなかったように見受けられました。シンポジウムのテーマに関して学会としてはどのような方向性を持ってその課題に取り組むのかを改めて伺うことができればと思います。

発表準備やスケジュールの関係で全ての自由研究発表を拝聴することができなかったのは残念ですが、いくつものご発表やシンポジウムでの討議を参考に今後とも研鑽を重ねて再度皆様のご意見をいただきたいと考えております。

学会の感想

ボロルマ・トルバト（東北大学大学院生）

今回の学会では「開発途上国における教師教育政策 モンゴルにおける教育開発マスタープランの分析を中心として」というテーマで発表させていただきました。私は日本の教員研修・教員教育政策について勉強していますので、これまでモンゴルの教育、教師教育について発表する機会はありませんでした。発表では、江原先生を始めたくさんの先生方に質問やアドバイスを頂き、またお話しすることができ、私にとってとてもいい勉強になりました。諸先生方に心から感謝申し上げます。

今回の学会のシンポジウムは留学生政策についてでしたので、一留学生として関心がありました。シンポジウムで発表された三人のパネリストの先生方や質問・コメントされた先生方のお話を聞いて、留学生に対する想いが高いことがわかりました。皆さんのお話を聞きながら次のような話を思い出しました。日本における外国人留学生の出身国第一位は中国ですが、留学生の出身国総人口に占める日本への外国人留学生の比率はモンゴルが第一位ということです。これは、モンゴルの人口はわずか250万人ではありますが、多くのモンゴル人が日本に関心をもっていることを示してくれるものだと思います。わたしは、留学生はみんな日本でたくさん勉強し、たくさん習い、たくさん学び、そして自国に帰って国の発展のためにここで習ったことを生かしていくことが日本への恩返しだと思っています。

最後になりますが、今回私の発表を聞いてくださり、貴重なアドバイスをしていただいた会長の江原先生、西村先生、実行委員長の宮腰先生、その他のお世話になった先生方に深くお礼を申し上げます。

3. 日本国際教育学会第17回総会議事録

日時：2006年11月26日（日）15時～15時30分

会場：東北大学大学院教育学研究科11階大会議室

議長：金城栄喜顧問

司会：大庭由子事務局長

記録：村山 拓事務局長補佐

開会の辞 大庭由子事務局長

開会にあたり、大庭事務局長より定足数の確認があり、国内在住の正会員 113 名、学会規約第 4 条第 3 項に基づき議決権を有する正会員数 85 名、当日の出席者 30 名、委任状提出者が 31 名で、本総会が学会規約第 2 条に基づき適正に成立していることを宣言された。

第 17 回大会実行委員長挨拶

宮腰英一第 17 回大会実行委員長より、学会員に対する歓迎の挨拶ならびに大会実行委員会の大迫章史事務局長の紹介があった。

東北大学開学 100 周年を翌年に控え、大会シンポジウムにはそれに関わるテーマとして「国際交流の 1 世紀」を掲げたとの趣旨説明があり、総会、懇親会と併せて学会員への活発な参加の要請があった。また、学会大会以外にも学会以外に仙台や周辺の観光も楽しめるよう、資料、情報も用意したので活用して欲しいとの挨拶、東北大学の案内と本学教育学研究科、教育学部の案内資料の紹介と、大学院生の進学等への協力依頼があった。

学会長挨拶

江原裕美会長より、大会実行委員会の大変整った大会準備と、実行委員会のメンバー、本学の大学院生、学部生からの心のこもった対応に感謝しているとの挨拶があった。

議長選出

大庭由子事務局長は議長選出方法について、総会出席者へ諮った。議長選出については学会執行部に一任され、江原裕美会長から金城栄喜顧問が指名された。

金城栄喜顧問は総会参加者の承認により、議長に就任した。

議長挨拶

金城栄喜議長から議長就任の挨拶があり、宮腰大会実行委員長、大迫大会実行委員会事務局長、白幡真紀大会実行委員会事務局次長へ感謝と敬意を表するとの挨拶があった。あわせて、総会議事のスムーズな運営への総会参加者への協力要請があった。

記録人の選任

金城栄喜議長は審議を厳正かつ慎重に進めるため記録人の選任を総会に提案し、承認された。金城栄喜議長は村山 拓事務局長補佐を記録人に選任した。

・ 報告、承認事項

・ 2005 年度事業報告

・ 2005 年度決算報告

金城栄喜議長は、報告、承認事項のうち、関連する上記二案を一括して上程することを提案し、了承された。

金城栄喜議長は、上記二案について、志賀幹郎前事務局長に報告、説明を求めた。

志賀前事務局長は配布資料「2005 年度事業報告」および「日本国際教育学会第 16 年度決算報告、同会計監査報告」に基づいて報告、説明を行った。

続いて、金城栄喜議長は、会計監査報告について、川下新次郎、吉田重和の両会計監査が欠席しているため、配布資料 4 頁をもって会計監査報告に代えたいとの提案を行い、承認された。

・ 紀要第 12 号紀要編集委員会報告

金城栄喜議長は、上記議案について、西村俊一紀要第12号編集委員長に報告を求めた。

西村俊一委員長から紀要第12号の編集、発行について報告があり、学会員への協力へ感謝が述べられた。併せて、紀要第13号編集委員会の活動に期待するとの挨拶があった。

・選挙管理委員会

金城栄喜議長は、上記議案について、平岡さつき選挙管理委員長に報告を求めた。

平岡さつき委員長からは、配布資料に基づき報告があった。

金城栄喜議長は、上記議案について一括して質疑を行った上で採決を行った。

上記議案は、全ての議案について提案趣旨説明の通り、可決した。

審議事項

金城栄喜議長は、関連する各議案を一括して上程することを提案し、承認された。

2006年度(2006年8月1日~2007年7月31日)活動計画(案)

・2006年度活動方針案

・2006年度予算案

金城栄喜議長は、上記二議案について、大庭事務局長に提案趣旨説明を求めた。

大庭由子事務局長は、配布資料に基づき、上記議案について提案内容と趣旨の説明を行った。活動方針については、例年通りの学会事業を進めるとともに、学会規約の最新版を発行することを今年度の重点活動としたいとの補足説明があった。予算案については、支出の部について、紀要発送の代金の変更、理事会、紀要編集委員会等の会合の充実のため、会合費を上乗せしたとの説明があった。

・紀要第13号編集について

金城栄喜議長は、上記議案について、志賀幹郎紀要第13号編集委員長に提案趣旨説明を求めた。

志賀委員長からは、紀要を本学会の最重点活動のひとつと位置づけ、編集、発行にあたり、300部発行予定であるとの説明があった。また、学会員への積極的な投稿の依頼があった。

金城栄喜議長は、上記三議案について、一括して質疑を行い、採決された。全ての議案について、全て提案通り可決された。

- (2) 著作権関係規定の取り扱いについて
- (3) 2007年春季研究大会の開催校について
- (4) 第18回大会の開催校について
- (5) その他

金城栄喜議長は、審議事項(2)~(5)について一括して審議する旨、提案し、了承された。併せて金城栄喜議長は、上記議案について、江原裕美会長に提案趣旨の説明を求めた。

江原裕美会長から、上記審議事項について、次のように説明があった。

審議事項(2)については、二重投稿、無断引用等、投稿への不適切な行為については規約の整備を済ませているが、著作権法、状況を踏まえ、規約の整備を行いたいとの提案趣旨と提案事項の説明

があった。

審議事項(3)の2007年春季大会については、現在会場校、日程等を継続して検討しており、ニューズレターにて発表するとの説明があった。都内の私立大学にて。大学側では受け入れを決めているとの経過説明も併せてなされた。

金城栄喜議長から、春季大会の開催校は、本来は総会にて可決した上で、大会開催校の代表から受け入れの挨拶をしてほしいところであるが、やむをえない事情があるため、早急に決定、発表して欲しいとの申し入れがあった。

金城栄喜議長は、上記2案について、質疑応答を求めた。同案は質疑応答を経て可決、決定した。

金城栄喜議長は審議事項(4)について、江原裕美会長に提案趣旨の説明を求めた。

江原裕美会長から提案趣旨の説明があり、次年度大会を、台湾の台北教育大学で開催することを検討しており、同大学の翁麗芳教授の内諾を得ているとの説明があった。併せて、国内の大会と違って資金が必要となることが予想されるため、そのひとつとして、日台交流センターの国際共同研究として日台交流センターの国際共同研究としての助成金の申請を行い、国際研究の諸課題を研究する場として位置づけたいとの説明がなされた。また、2007年春季大会でもそれと連動させて、国際教育に関する国際シンポジウムを開催する予定であることも報告された。

金城栄喜議長は、同案について、質疑応答を求めた。同案は質疑応答を経て、可決、承認された。

金城栄喜議長の求めに応じ、台北教育大学の翁麗芳会員から、会員各位を心から歓迎するとともに、来年のこの時期に各会員とともに大会を作っていきたいとの挨拶があった。

金城栄喜議長は、審議事項(5)について、提案内容と提案趣旨の説明を求めた。

江原裕美会長は、学会規則第3条の会員資格について、規約の改正を行い、入会申し込み推奨人を必要とすることを提案した。これまでは入会申し込みにあたって、経歴、業績等のチェックが十分に出来ていなかったこと、大会直前の理事会での入会審査を経て大会で発表する予定であった入会希望者が直前に発表を取り消すなどして今回の東北大学を始めとする大会開催校に迷惑をかけていることの二点を提案理由として説明した。また、身近に推薦者が見つからない場合でも、会長、事務局長などが対応することが可能であり、入会が阻害されることはないとの補足説明もなされた。

金城栄喜議長は、本議案が学会規則第9条に基づく特別決議であることを改めて確認した上で、質疑応答を求めた。同案は質疑応答を経て、可決、決定された。

金城栄喜議長は、同案が特別決議に基づき即日発効することを宣言した。

金城栄喜議長は、その他の審議事項について、総会出席者に発議を求めた。総会出席者、委任状提出者からの発議はなく、金城栄喜議長は審議事項(5)の審議の終了を確認した。

議長降壇

金城栄喜議長は、全ての議案の審議が終了したことに伴い、江原裕美会長以下、新執行部への信任が得られ、全議案が滞りなく承認、可決したことについて、総会出席者へ感謝するとの挨拶を行い、降壇した。

閉会の辞

前田耕司副会長より、総会出席の会員に感謝するとともに、充実した施設での素晴らしい大会、総会開催について、宮腰英一大会実行委員長、大迫章史大会実行委員会事務局長、白幡真紀大会実行委員会事務局長、東北大学の大学院生、学部生に感謝するとの挨拶があった。

4. 日本国際教育学会 第17回大会 収支報告

収入		
項目	金額	備考
大会補助	150000	
大会参加費	69000	3000円×19名 2000円×6名
懇親会費	61000	4000円×13名 3000円×3名
寄附金	10000	吉留杉雄様
計	290000	

支出		
項目	金額	
印刷代	45612	発表要旨集録
送料	45530	大会案内・プログラム等発送費(国内・国外)
備品・消耗品	7415	ラベル代・紙代・ペン代等
湯茶接待	4154	控え室・理事会等の茶菓子・飲み物代
学生アルバイト昼食代	4000	400円×10名
学生アルバイト代	27000	3000円×9名
懇親会費	41410	
建物使用料	40934	東北大学教育学研究科会場使用(振込手数料込)
光熱費	10946	東北大学教育学研究科会場使用
シンポジスト謝礼	40000	20000円×2名
計	267001	

残金 22999 円は学会事務局に送金する

2007年1月31日

以上相違ありません。
大会実行委員長 宮腰 英一

5. 2006年度(第18年度)決算報告

日本国際教育学会 2005年度決算報告
(期間 2005年8月1日～2006年7月31日)

収入の部

項目	予算	決算	詳細
前年度繰越金	1,170,656	1,170,656	郵便振替口座 402,000円、郵便貯金口座 712,490円、東京三菱銀行 106,166円
20周年記念企画積立		50,000	積立金
会費	900,000	902,000	正会員 78名 学生会員 23名 賛助会員 1名
利子	10	19	郵便貯金利子

紀要販売	100,000	51,000	上越教育大学など合計 10 機関、購読会員 7 名
寄付金	0	0	
雑収入	20,000	91,092	第 15 回大会残金、第 16 回大会戻し分など
収入合計	2,190,666	2,264,767	

支出の部

項目	予算	決算	詳細
交通費	5,000	4,260	会計監査交通費など
消耗品費	50,000	11,270	封筒、ラベル用紙
郵送費	150,000	52,924	切手代、紀要発送代金など
会合費	20,000	9,576	理事会・紀要編集委員会準備代
大会開催補助費	150,000	171,254	第 16 回大会開催補助費
庶務費	40,000	3,992	コピー代 雑費
印刷費	500,000	489,242	Newsletter・紀要・名簿印刷代金
予備費	30,000	39,365	2005 年春季研究大会補填など
次年度繰越金	1,195,666	1,432,884	
20 周年記念企画積立	50,000	50,000	
支出合計	2,190,666	2,264,767	

上記の通り報告いたします。

2006年 11月 20日

監査の結果、正確であったことを認めます。

2006年 11月 20日

2006年 11月 20日

事務局長

志賀幹郎 (印)

会計監査

川下新太郎 (印)

会計監査

吉田重和 (印)

日本国際教育学会 2006 年度予算案
(期間 2006 年 8 月 1 日 ~ 2007 年 7 月 31 日)

収入の部

項目	予算	詳細
前年度繰越金	1,432,884	
20 周年記念企画積立	50,000	積立金
会費	900,000	正会員 10,000 × 70 口 学生会員 5,000 × 40 口
利子	10	郵便貯金利子
紀要販売	60,000	機関・個人購読 3,000 × 20 口
寄付金	0	
雑収入	0	
収入合計	2,442,894	

支出の部

項目	予算	詳細
交通費	5,000	会計監査交通費など

消耗品費	40,000	封筒、ラベル用紙
郵送費	100,000	切手代、紀要発送代金など
会合費	40,000	理事会・紀要編集委員会など
大会開催補助費	150,000	大会開催補助費
庶務費	60,000	コピー代、通信費、選挙管理委員会印作成費等
印刷費	550,000	Newsletter・紀要・名簿印刷代金
予備費	50,000	
次年度繰越金	1,297,894	
20周年記念企画積立	150,000	2004年～2006年度の3年度分
支出合計	2,442,894	

6. 2006 - 2007 年度役員一覧

役職	氏名	所属	国籍
会長	江原 裕美	帝京大学	日本
副会長	前田 耕司	早稲田大学	日本
理事	岡田 昭人	東京外国語大学	日本
同	小澤 周三	東京外国語大学(名誉) 帝京平成大学	日本
同	佐藤 尚子	神戸山手大学	日本
同	志賀 幹郎	電気通信大学	日本
同	鈴木 慎一	早稲田大学(名誉)	日本
同	王 智新	宮崎公立大学	中国
同	延岡 繁	中部大学	スウェーデン
同	朴 三石	朝鮮大学校	朝鮮
同	グレゴリー・プール	高千穂大学	米国
同	ロバート・アスピノール	滋賀大学	英国
事務局長	大庭 由子	秀明大学	
事務局長補佐	金塚 基	帝京大学福祉・保育専門学校	
同	佐藤 優子	早稲田大学(院生)	
同	村山 拓	東京大学(院生)	
同	吉田 重和	早稲田大学(院生)	
同	渡辺 幸倫	大東文化大学(非常勤)	
ウェブ担当	山崎 直也	国際教養大学	
紀要編集委員会委員長	志賀 幹郎	電気通信大学	
同 副委員長	グレゴリー・プール	高千穂大学	
同 幹事	村山 拓	東京大学(院生)	
会計監査	長井 真友子	日本大学	
同	中山 夏恵	前橋国際大学	
選挙管理委員長	大迫 章史	仙台白百合女子大学	
名誉理事(国内)	宮脇 弘幸	宮城学院大学	
名誉理事(国内)	西村 俊一	東京学芸大学	

名誉理事（海外）	Moacir Gadotti	サンパウロ大学 パウロフレイレ研究所	
顧問	金城 栄喜	シアトル大学東アジア経済研 究所	

2007 年春季大会のご案内

大会実行委員長 天野隆雄（東京未来大学）

春季研究大会を下記の要領で開催することとなりましたのでご案内申し上げます。大会実行委員会は、微力ながら皆様にご満足いただけるような研究会を実現すべく努力いたしますので何卒ご協力のほどをお願い申し上げます。

1．日時

2007 年 5 月 26 日（土）午前 9：30～

自由研究発表等

その他（懇親会等の場所・時間は後日お知らせ致します）

2．会場

東京未来大学

〒120-0023 東京都足立区千住曙町 34-12

路線 / 駅近辺案内図 <http://www.tokymirai.jp/access/index.html>

TEL:03-5813-2525（代）

FAX:03-5813-2529（「天野」宛）

EMAIL:kanatsuka@aoni.waseda.jp

3．参加費・懇親会費

参加費：一般 1000 円、学生 500 円

懇親会費：一般 4000 円、学生：2000 円

4．参加および自由研究発表の申し込み

・参加および自由研究発表の希望者は、大会実行事務局金塚 kanatsuka@aoni.waseda.jp 宛に、2007 年 3 月末日（必着）までに必要事項を記入の上お申し込みください。

・発表の持ち時間は、口頭発表 20 分、質疑応答 10 分の計 30 分です。

・なお、発表者は会員に限られますので、非会員で発表をご希望の方は、入会手続きを www.soc.nii.ac.jp/jies/nyukai.html までお済ませください。

・後日、発表者には、発表要旨（A4×2 枚）をご提出いただきます。

事務局だより

1. 新名簿作成のため連絡先・ご所属変更をお知らせ下さい。

4月からの新年度を迎え、所属変更にともない会員資格に変更がある方、2007年11月現在の連絡先が変更になる方がおられましたら、事務局長の大庭由子までメール(ooba@ts.shumei-u.ac.jp)またはFAX(047-488-8290)にてご一報下さい。2007年11月の学会にて紀要とご一緒に会員名簿をお渡ししたいと考えております。なお、名簿掲載の内容は、前回の内容に準じます。

2. 新入会員紹介

2006年度第3回(2006年5月13日開催)、および2006年度第1回(2006年8月7日開催)、第2回(2006年11月25日開催)の常任理事会で入会を承認された新入会員の皆様をご紹介します。

氏名	所属	会員の種別	国籍
池田 実奈	北海道大学大学院教育学研究科	学生賛助会員	日本
大倉 峰雄	東北福祉大学	正会員	日本
大原 健治	高知大学大学院工学研究科	学生正会員	日本
高坂 香津美	大阪大学大学院言語文化研究科	学生正会員	日本
羽井佐 昭彦	千葉工業大学	正会員	日本
古坂 肇	早稲田大学大学院教育学研究科	学生会員	日本
ポロルマ・トルバト	東北大学大学院教育学教育研究科	学生会員	モンゴル
山本 聡子	一橋大学大学院言語社会研究科	学生会員	日本
若園 雄志郎	早稲田大学大学院研究科	学生会員	日本

学会紀要『国際教育』第13号原稿募集

紀要編集委員会では『国際教育』第13号の発刊に際し、自由投稿論文、研究ノート、調査報告、教育情報、書評、資料紹介を募集いたします。(2007年5月10日締め切り)

投稿希望の会員は、下記の要領にしたがって投稿して下さい。詳しくは、「紀要投稿要領」をご参照下さい。紀要投稿要領をお持ちでない方は学会事務局にご照会下さい。なお、本号より研究ノート及び調査報告の制限字数が変更になっておりますのでご注意ください。

紀要投稿要領

1. 論文のテーマは日本国際教育学会活動の趣旨に沿うものとする。
2. 掲載論文は、口頭発表の場合を除き、未発表のものに限る。
3. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
4. 原稿は横書き、ワープロ書き、10.5ポイント、A4判に1行40字×40行(1,600字)とする。執筆量は、和文では、論文28,000字以内、研究ノート及び調査報告書8,000字以内、教育情報・

- 書評・資料紹介 2,400 字以内．英文では，A4 ダブル・スペース 22 行でそれぞれ 40 枚以内，15 枚以内，4 枚以内．中文では，それぞれ 16,000 字以内，4,500 字以内，1,200 字以内．英文原稿は American Psychological Association's Manual of Style, 4th Edition に準拠する．題目は 12 ポイントとし，日本語・中国語の場合は副題も含めて 30 文字，英語の場合は 15 語以内とする．
5. 投稿原稿には和文論文には英語 500 語以内の要旨，英語・中国語論文には日本語の要旨(A4×1 枚程度)を添付し，原稿と要旨を各 3 部(うち 2 部は複写，匿名とする)提出する．
 6. 投稿原稿は **2007 年 5 月 10 日(当日消印有効)** までに，紀要編集委員会事務局宛提出するものとする．投稿原稿は、紀要編集委員会において査読を行い，採択，条件付き採択，不採択が決定され，投稿者に通知される。条件付き採択の場合、修正投稿の権利が与えられる。修正投稿原稿についても審査を行う。
なお，採用原稿に関しては原稿(ハードコピー)とともに電子ファイル原稿(英文要旨を含む)も提出すること．

* 問い合わせ先・原稿送付先：

住所：〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1 電気通信大学

国際交流推進センター 志賀研究室

紀要編集委員長 志賀 幹郎

TEL : 042-443-5738 E-mail : shiga@fedu.uec.ac.jp

CALL FOR PAPERS: JOURNAL of INTERNATIONAL EDUCATION, Volume 13

Submissions to the 13th edition of *Journal of International Education* are now being accepted, with a **deadline of May 10th, 2007**. Authors making submissions in English should review these guidelines:

1. Manuscripts include research articles and research notes, which must be the original work of the author(s).
2. Papers should be double spaced, submitted on A4-size paper, contain twenty-two lines per page, and be no longer than forty pages in total length. Margins on the top, bottom, and sides should be no shorter than 2.5 centimeters (i.e., one inch).
3. For general guidelines on appropriate style and format, please refer to the *Publication Manual of the American Psychological Association*.

Example:

Smith, J. (2000). The educational challenges of the new century. New York: Broadway Publishing.

Pavil, S. (1997). Capitalizing on cultural capital: The movement of knowledge through corporations. Harvard Business Journal, 14 (1), 654-675.

4. Three copies should be submitted to the Editorial Committee for review. One copy should include the author's name, address, institutional affiliation, and phone number on the cover, and the other two should include only the title in order to maintain the author's anonymity. An Electronic version should also be included.
5. All English manuscripts must include a Japanese abstract that is one page in length (A4 size).
6. All manuscripts will be accepted without revisions; accepted conditionally, with stipulations for more revisions; or rejected. In the case of conditional acceptance, the Editorial Committee

reserves the right to reject a manuscript after revisions have been made if revisions are deemed insufficient.

Once the manuscript was accepted for the publication, author should submit the electronic version(including Japanese abstract).

7. Authors for whom English is a foreign language are recommended to have their manuscripts carefully proofread by a native speaker of English before submitting the paper. Writers who submit manuscripts that have so many English mistakes so as to make the content indecipherable risk having their papers rejected.

Electronic versions of manuscripts will not be accepted. Please send all submissions by regular post to Mikio Shiga, The University of Electro-Communications, 1-5-1 Chofugaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8585. Inquiries about the journal may be directed to Mr. Shiga by telephone at 042-443-5738 or E-mail at shiga@fedu.uec.ac.jp

図 書 紹 介

蘇林『現代中国のジェンダー』明石書店、2005年

「現代中国叢書」シリーズの一冊として『現代中国のジェンダー』を明石書店から出版された。これは、一在日中国人女性の自らの立場を中国におけるジェンダーという視点から考察したものである。

20年前、2才になった娘と医者をしている夫を中国に残し、内蒙古自治区政府派遣の公費留学生として日本に留学したとき、中国では周りに不思議に思われなかったが、日本ではその選択をなかなか理解してもらえなかった。特に、中国では1人子政策(子どもが1人しか産めない政策)を実施しているのに、母親である自分が子どもを育てず、本国に残して留学に来たということを理解し難いようで、いつも「蘇さんは偉いですね、お子さんもご主人も中国において。お子さんは寂しくないでしょうか、ご主人は大丈夫でしょうか」などと口では言うが、その目からは少しも偉いと感じているようには読み取れず、まったく不思議な人だと疑うような表情であった。そのときから、筆者は日中両国の女性観や価値観の違いを体験的に感じ取るようになり、女性問題に関心を寄せるようになった。そして、いつか中国人女性のありのままの姿を文章として日本の人々に伝えたいと思っていた。これが女性学を専門外とする私が、今回の執筆を引き受ようと決めた動機のひとつである。

現代中国は高度経済成長期に入り、社会もめまぐるしく変容しつつある。地域の発展や収入の高低による貧富の差が拡大し、また、社会の変化に相応して女性の価値観も大きく様変わりしてきており、『現代中国のジェンダー』をまとめるのに際し、現代中国におけるジェンダーに関わる多種多様に直面した。そのため、論点、論述上、不十分な点多々見られることと思う。

現代の中国では、スポーツ、文化、経済、政治等々、各分野で多くの女性が活躍している。彼女達は自らの能力や才識を發揮し、人類社会の「半边天」(天の半分を支える)の役割を十分に果たし、「女強人」と呼ばれることがある。例えば、サッカー、バレーボールなどでは世界のトップレベルの位置にあり、男性チームより女性チームの方が優秀な成績を収めているため、中国では一時「陰盛陽衰」(陰である女性が活躍して勢いが盛んとなり、男性は衰えている)という声が四方で聞かれた。この「陰盛陽衰」現象は現代中国で一般的と言ってもよいほどである。しかし、その反面、女性自身、特に著名人は、「做女人難、做個名女人更難」(女性は、特に著名な女性は、何をするにつけても男性とは異なり困難が多い)と、自身の艱難を感嘆しつつ、男尊女卑思想と戦い、女性の存在価値とその意義を世間に示そうとしている。

その女性たちが感じる「難」は、単に男性と生物学的・生理的差異から感じるものではなからう。生理的「男女有別」という考え方は誰もが持っているが、しかし、それ以外に、歴史的、文化的そして社会的に形成された男女の差異から感じられた「難」を、ジェンダーの視点から現実の中国女性像を日本の読者に紹介してみた。(北海商科大学商学部助教授 蘇林)

日本社会教育学会編『社会的排除と社会教育』東洋館出版、2006年

本書は、日本社会教育学会の年報第50集である。日本社会教育学会は1999年の東北・北海道地区の研究集会を始め、2004年にワーキング方式のプロジェクト研究「社会的排除と社会統合」を発足し、多角的に社会的排除と社会教育に関する研究を重ねてきた。本書はその蓄積されてきた研究成果をベースに編集されたものである。その特色は、ヨーロッパ諸国の社会政策、社会教育実践における社会的排除概念の位置づけと意味を探りながら、日本における社会変動の現状に即して、社会的排除に抗する社会教育の理論と実践を踏まえ、その課題および可能性についての探究を試みたことである。

本書は、17本の論文が収められ、三部構成となっている。第一部「概念・理論・政策」では、社会的排除とは何か、それを生み出した多次元的な要因、およびそれを強めた歴史的な文脈を解明しつつ、社会的排除と包摂のための社会教育の理論的、政策的な検討を行っている。第二部「社会的排除の諸相と対抗的実践の課題」では、ヨーロッパをはじめ、日本を含む社会的排除の実相を多面的に把握するとともに、政治的、経済的、社会的諸側面により対抗する社会的実践の実態、および課題を論じている。第三部「社会教育実践の課題 施設・組織化・学習論」では、高等継続教育機関、大学、多国籍間交流プロジェクト、成人学習コミュニティ等の多様な事例を通し、社会的排除に対抗する社会教育実践の意義を確認したうえで、新しい生涯学習・社会教育の学習論の構築の可能性に関する検討を行っている。

いつの時代どの国においても、社会から排除された人々や地域は存在する。それは社会構造の問題として意識され、国際的な問題となってきた。それゆえに、社会構造の変動に伴う社会的排除の進展を動的な視点により捉え、それに対抗する社会政策・社会教育実践の課題を探究する本書は、「なぜ、今、社会的排除なのか」という問いの解答を見出すのに大変参考になる一冊である。ぜひ一読をお勧めしたい。(早稲田大学非常勤講師 裘曉蘭)

寄 贈 文 献 一 覧

学会に寄贈いただきました書籍・刊行物を紹介いたします。

『樺』(川村学園女子大学図書館報)第15号、2006.1

『Forum』(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科広報誌)第9号、2005.3

『Forum』(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科広報誌)第10号、2006.3

『学校教育学研究論集』第11号、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2005.3

『学校教育学研究論集』第12号、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2005.10

『学校教育学研究論集』第13号、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2006.3

「東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 2006 概要」

末弘美樹『日本人留学生のアイデンティティ変容』大阪大学出版会、2006.2

- 『文部科学省 特色ある大学教育支援プログラム事例集』財団法人大学基準協会、2006.2
- 『国立情報学研究所ニュース』No.31、2006.2
- 『国立情報学研究所ニュース』No.32、2006.6
- 『児童教育研究』第15号、安田女子大学児童教育学会、2006
- 『安田女子大学教育総合研究所年報』創刊号、2006.3
- 『安田女子大学教育総合研究所要覧』(平成18年度)
- 『川村学園女子大学研究紀要』第17巻第1号、2006.3
- 『川村学園女子大学研究紀要』第17巻第2号、2006.3.
- 『大学通信教育基準』財団法人大学基準協会、2006.3
- 『The Japan Foundation 2004 Annual Report』 2005.3
- 『高等教育におけるeラーニングの質保証』(メディア教育開発センター国際シンポジウム2005報告書)、2006.3
- NIME International Symposium 2005; Quality Assurance of e-Learning in Higher Education, National Institute of Multimedia Education, 2006
- 『メディア教育研究』Vol.2, No.2、メディア教育開発センター、2006.2
- 『eラーニング等のITを活用した教育に関する調査報告書(2005年度)』、メディア教育開発センター、2006.3
- 『じゅあ』第36号、大学基準協会、2006
- 『大学評価研究』第5号、大学基準協会、2006
- 『博士学位論文』 論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨(第9号)
東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 平成18年7月
- 『大学テキスト国際協力論』友松篤信、桂井宏一郎編 古今書院 2006
- 『東京学芸大学大学案内2007』 東京学芸大学
- 『国際シンポジウム2006』 独立行政法人メディア教育開発センター(開催案内)平成18年8月7日

研究エピソード～台湾編～

英語を追いかける人たち

翁 麗芳(国立台北教育大学 跨國婚姻與兒童教養中心)

「外籍配偶」(外国籍花嫁)の子育て問題は我がセンターの重要研究課題であります。現在、新生児8人に1人の「外籍配偶子女」であるように、外国籍花嫁とその子女は急速に増加、教育を始め、いろいろな面で台湾に衝撃を与えています。したがって「外籍配偶生活訓練班」という成人教育学級を夜間や夏休み中に多くの小学校で行うようになりました。「外籍配偶」をより理解するため、一昨年の夏、私は講師担当の要請を受け入れました。

会場は小学校の教室で、台湾の就学前教育の現状をテーマに話しました。参加者は、20人ほどの二十代前半の女性で、中では子連れの方もいるため、ちょっと詰まってる感じでしたが、子どもが玩具を弄る音の他、シンとして、静かでした。大学での騒々しい授業風景に比べれば、みなは信じられないほどまじめな顔でした。そのあまりの真剣さに私は不安を覚え、「なんでもかまいません。話のわからない部分でも、または他のどんな事でも聞いてください。」とやさしく問いかけました。反応がないため、「今からお子様は幼稚園や託児所に入る方いるのでしょうか。幼稚園の選びに悩んでるのでしょうか」と試しに問いかけました。そしたら、「先生、英語、何時」とたどたどしい中国語(北京語)で、私に

質問を口にした一人のお母さんが手をあげてくれました。

台湾はまさに英語習得熱中社会、就学前段階では特に幼児英語ブームであります。住宅のポストにはもちろん、駅や市場や人込みの街角でもよく子ども英語塾や英語幼稚園のDMが配ばられています。当のお母さんの話では、英語塾や英語幼稚園のDMをもらった上、幼児英語教材売り込みの電話が何回もかかってきたそうです。ご主人は「セールスだ。客だました」といい、全然のる気はないのですが、その「セールス」の電話を直接受けた彼女は動揺していました。「子どもにいくつから英語を習わせればいいのか」と真剣に悩んでいました。

英語教育プラス早期教育ブームの現状の中、幼児教育研究者として、若いお母さんに幼児英語塾などの質問をよく受けていました。まさかベトナム籍お母さんからまったく同じ質問が出ることは予想外で、しばらく私は答えられませんでした。ベトナム籍女性が台湾の家庭に入籍しても、台湾では殆どベトナム語は使いません（使わせてもらえません）。嫁に来台してから、すぐにこどもを作り、台湾語や北京語を懸命に励んでいました。こどもの宿題をチェックするのは母親の務めですから、こどもが小学校に上がるまで北京語を習得するようにと、みなに期待されます。

言語教育の目的は何であろう。これらの母親たちにとって、ベトナム語は何であろう。中国語（北京語）、台湾語は何であろう。英語は何であろう。彼女たちの子どもの母語は何であろう。中国語（北京語）、台湾語は何であろう？あの夏、あの若いベトナム母親のことはいまだに心に残っています。自分の子を台湾の子らしく育とうと頑張る母親の姿。母語を捨て、英語を追いかける台湾人の姿。

シンポジウムのお知らせ

西村俊一会員より

東京学芸大学 国際教育シンポジウム

日時：2007年3月3日（土）

場所：虎ノ門パストラルホテル

シンポジウム日程：

9：30より受付

10：00～12：00 特別講演 「グローバル化と教育 - 21世紀の教育を考える - 」 広田照幸

13：10～14：40 講演 「言語学と言語教育 - 南の島と日本で - 」 杉田洋

15：00～16：30 講演 「国際教育研究の回顧と展望」 西村俊一

参加申込：申し込み c-event@u-gakugei.ac.jp または FAX 042-329-7722

問い合わせ：東京学芸大学国際教育センター事務局 042-329-7721

<http://crie.u-gakugei.ac.jp/> に情報

（定員 100名 参加料無料）

鈴木慎一会員より

今年も上半期（4～9月）にいくつか国際教育関連の会合があります。2～3月中に開催されるものについては CIES（アメリカ）などがありますが、この「ニュースレター」には間に合わないのので省いてあります。詳細はそれぞれのウェブサイトを開いて確かめてください。

、Higher education Summit 2007/02/01

“ Synergies Through Partnership in Higher Education ” ,

26—27 April, 2007

New Delhi, India <http://www.ficci-hen.com>

- 、 6th IASTED International Conference
 - “ On Web-based Education 2007 ”
 - 14—16 March, 2007
 - le majestic centre de congres
 - Chamonix, France <http://www.iasted.org/conference/home-557.html>
- 、 Humboldt-Tokyo-Waseda Universities Symposium
 - “ Restructuring Social Orders: ceremonies, rituals and symbolic representations in revolutionary societies ”
 - 13—15 April, 2007
 - Waseda University, Tokyo yamaki@waseda.jp, nagashima@waseda.jp
- 、 Pacific Circle Consortium: 31st Conference 2007
 - “ Education in a Oacif Context: Education Outcomes for the 21st Century ”
 - 25—29 June, 2007
 - Honolulu, Hawaii
- 、 Institute of Education University of London
 - “ Learning Together: Reshaping Higher Education in a Global Age ”
 - 22—24 July, 2007
 - Institute of Education, University of London
 - <http://www.ioe.ac.uk/efps/conference/learningtogether>
- 、 SEDA Spring Conference 2007
 - “ Exploring Enhancement in Further and Higher Education ”
 - 10—11 May, 2007
 - Glasgow, UK <http://www.seda.ac.uk/confs/glas07/htm>
- 、 XIII World Council of Comparative Education Societies
 - “ Living Together: Education and International Dialogue ”
 - 3—7 September, 2007, Sarajevo <http://www.wcces.net/>
- 、 9th Oxford International Conference on Education and Development
 - “ Going for Growth? : School, Community, Economy, Nation ”
 - 11—13 Srptember, 2007
 - Oxford, UK <http://www.cfbt.com/ukfiet/>

日本国際教育学会 Newsletter No.18

編集発行 : 日本国際教育学会 代表 江原裕美

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jies/>

発行所 : 〒276-0003 千葉県八千代市大学町 1-1

秀明大学英語情報マネジメント学部大庭由子研究室気付

TEL : 047-488-2111 (代)

FAX : 047-488-8290 (大学事務所)

E-mail : ooba@ts.shumei-u.ac.jp

発行年月日 : 2007年2月16日